

# 夏祭りを続けていくこと

〔大分県保戸島〕

本誌編集部

今年度より施行された改正離島振興法の第十六条（地域文化の振興）には、「……伝承されてきた多様な文化的所産の保存及び活用並びに担い手の育成について適切な措置が講ぜられるよう努めるとともに、地域における文化の振興について適切な配慮をするものとする」と明記されている。筆者は、これら条文やこれまでの経験などから「地域文化・行事の継承は《重要》なことなのだ」と、頭のなかでなんとなく分かった気になっていた。保戸島（大分県津久見市）の加茂神社の夏祭りへの参加は、その《重要性》を、まさに身をもって知ることができた骨身にこたえる経験であった（夏祭りの模様や概要については、本号「巻頭グラビア」および「島の精神文化誌」参照）。

## 住民総出の大祭

「うれし目出度な若松様よ」「よおーいよい」「枝も栄えて葉も繁る」「よおーいよおーいよおーいやな」

集落の西側の高台に鎮座する加茂神社より、ご神体をお乗せした神輿のお浜出（お下り）が始まる。神輿の前列を担ぐのは、神崎智也ともなひさん。同神社の宮守を務める神崎宏宏まひろさんの子息で島生まれ島育ち、保戸島中学校ただひとりひとりの三年生である。その横や後ろには、津久見市議会議員の島田勝さんや、島の海岸清掃活動などで集めた海洋ゴミを加工したコースターの制作・販売を手掛ける中村聖也さんなどの島出身者が並ぶ。保戸島小中学校の先生や筆者のような島外からの担ぎ手は、神輿の側面や後列につく者が多いようだ。

「一夜泊まりの氏神様は」「よおーいよい」「仮の御殿にお下りなさる」「よおーいよおーいよおーいやな」

御神幸ごしんこうの歌を唄う人は決まっておらず、歌を知っている者が誰彼無しに唄い始めるといふ。神輿が下る時には戦いの歌は唄わないなど、いくつかのきまりがあるため、必然的に保戸島出身者が音頭をとることとなる。島外からの担ぎ手たちはそれをよく聞き覚えながら、歌詞や旋律、合いの手などをつかんでいく。

急な階段、細い路地を下りて集落に入ると、地元の方々やこの日のために帰ってきた出郷者、観光客などの歓声が耳に届く。遠洋マグロ漁業の拠点として栄えたこの島で、若い男たちがマグロ船に乗り航海に出ている間、家を



祭り1日目のお浜出の様様。

守ってきたのは女性たちだ。だからだろうか、島のお母さんたちの力強い声援や笑い顔が強く印象に残っている。

現在、宿泊施設のない保戸島にゲストハウス兼レンタルルームを整備中の江藤健さんは、少し離れた場所から神輿の様子を見守っていた。「保戸島で生まれ育った者として、本当は神輿を担ぎたかった。でも島では、ここ一年の

うちに身内に不幸があった者は担ぐことができないというしきたりがある。来年こそは、ぜひ参加したい」

### 地域づくりの縮図

さまざまな人々が一体となって地域の繁栄を祈願する保戸島の夏祭り。筆者は、神輿を担ぎながら「この行事のなかには島づくりのあるべき姿が凝縮されている」と感じていた。

島の方々が音頭をとり、(筆者のような)いわゆる《関係人口》がその声に耳を傾けながら側面・後方を支える。そして、地元の高齢者や来島者など御神幸を見守る人々も一緒にたつて行事を盛り上げていく——。祭り自体は二日間であり、祭事と地域づくりとはその行為の本質(目的)は異なるものである。しかし、多様な背景・思いを持つ者たちが相互扶助しながら、島の発展を願って行動するこの夏祭りのような一体感の醸成、経験の積み重ねこそ

が「持続可能な地域づくり」へとつながっていくのではないだろうか。

また、地域行事は出身者や関係者たちと島との結びつきを維持したり、新たな関係人口など創出のきっかけとしても機能していることも、今回、輪の中に加わることで改めて実感したことのひとつである。

保戸島の夏祭りが一番盛り上がるのは、二日目の神輿が集落を練り歩き、海へと入っていく勇壮な場面だろう。また、浜から「一夜泊まりの氏神様はさばこれからお帰るな」と、神輿が急な階段を上って加茂神社へと帰っていくシーンをあげる人もいるかもしれない。

じつは今回、筆者は一日目しか神輿を担ぐことができなかった。来年こそは両日ともに大祭りに参加し、保戸島の未来とともに、地域行事を継承することの意味をいまいちど考えたい。

(文・森田/写真・小原佐和子)